

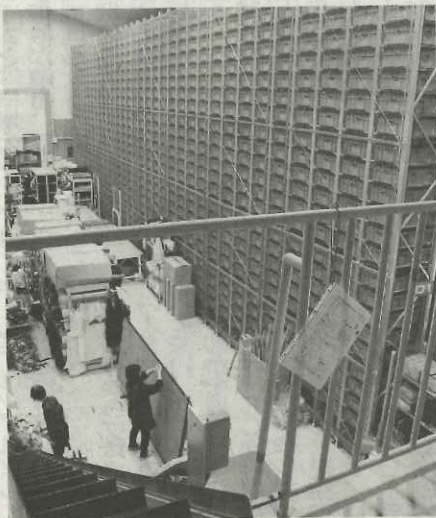
ここ数年のオーダーメイドスーツブームによって、限られた生産能力の国内縫製工場はフル稼働状態が続き、納期が長期化する傾向にあった。人気が集まる店舗では1〜2カ月待ちとなり、販売機会ロスが発生するほどだった。こうした状況を打破するため、一部、国内工場の移設・拡大や新設、他社からの譲渡などで生産能力の増強を進める体力のある企業も出てきた。さらなるオーダースーツ需要の掘り起こしを狙い、IT化への投資によって1週間納期を実現する企業の動向が注目される。

ITを使って省力化

イーソーオーダースーツのオリジナルテクノロジー青森工場は昨夏に移転・増強し、IT化による短納期と省力化を進める。受発注のデータ送信や生地自動倉庫など、裁断までの前工程を効率化することで、業界最速の「1週間オーダー」を実現する。同社は近隣の青森県田舎館村の廃校となった小学校に移転・リノ

進化 深化する オーダースーツ工場 ㊦

1週間納期で新たな需要を開拓



自動倉庫を導入したオリジナルテクノロジー青森工場

作業していた業務も夜間自動マーケティングに変えることで、生産効率の向上につながる。いままで紙を使っていた受注業務も、取引先との相互データの通信による省力化によって

ペーショにし、新工場を立ち上げた。新工場の最大の特徴はIT化。体育館の8階の天井高を活用した高層の自動倉庫は15000の生地が入ったボックスを40秒以内で出し入れ可能にした。バーコードで呼び出したボックスの生地を着分でカットした自動倉庫に戻す。従来、従業員が入力

入力時間の短縮、入力ミスの削減を実現した。浮いた3分の1の人材も他部署で活躍してもらっている。

縫製の前工程を短縮

1週間オーダーの流れは次のようなものだ。1日目は店頭での注文。システム化によってタブレット端末を使えば、瞬時に縫製工場へオーダー

内容が送信される。その日の夜に、工場で型紙作成のCAD(コンピュータ)による設計)システムを自動マーケティングで動作させる。2日目の朝には自動倉庫で注文品の生地が準備され、CAM(コンピュータ)による生産)によって裁断される。同時にオーダー内容に基づき、裏地やボタン、縫い糸などパーツを選び出す。

3〜5日目は縫製作業。IT化で前工程は短縮するが、従来の縫製工程数300を320に増やし、スピードと品質の両面を向上させた。6日目は検品・出荷作業。通常、まとめ作業は外注することが多いが、納期短縮のため工場内で作業し、客の手元に直送するので、7日目には出来上がった商品が届く。

1週間オーダーはグループ全体の3分の1の生産量、日産100着前後までを目安とする。これは工場の

繁忙期・閑散期などの生産量の増減を平準化し、安定稼働するための。受発注やCADデータなどのIT化によって工場のハブ化が可能になる。同社のオーダーシステムとデジタル連携することで、同社グループのオーダー専門店「ビッグウイジョン」だけでなく、他社販売店のオーダースーツでも1週間オーダーは可能となる。通常なら数カ月かかるオリジナルモデルの作成期間も短縮できる。

1週間オーダーの実現は、既製スーツ市場にとっても脅威になりうる。これまでオーダースーツが支持を広げてきた大きな要因である、リーズナブルな価格で自分好みの1着を仕立てられる点に加え、裾上げした既製品を受け取りに行くのと変わらない短納期は大きな武器になるだろう。初回に採寸データを登録すれば、2着目からはスマートフォンでの注文も可能となる時代だからこそ、IT化によって気軽に選べて手軽に届く仕組みは新たな需要を喚起できるだろう。